

佳作

おじいちゃんの手

東京都 奈良愛子

私が毎年夏休みとお正月に田舎に帰ると、きまって行われることがある。「そこ立ってみ」と柱を指さして言う。私が立つと、私の頭の上に手をのせるようにして、頭に手のひらがつかつかないかぐらいで、「またこんなにのびたんだなあ」と、柱に傷をつけて、手を引っ込める。そして私の顔をのぞきこんで、嬉しそうに笑いかけてくれる。私もつられて笑顔になる。これは、私が立てるようになったときから、私とおじいちゃんの2人でつづけていた。幼稚園のころは、おじいちゃんの嬉しそうな顔が見たくて、牛乳をゴクゴク飲んでた。

だが、私にはおじいちゃんと一緒に遊んだり、頭をなでてもらった記憶がない。何故か、おじいちゃんとの思い出は、その柱だけだった。

去年の冬、おじいちゃんは亡くなった。とても大きな人だったのに、遺体はしわしわでしぼんで見えた。おじいちゃんの手を触ったとき、私は理解した。おじいちゃんの手は、指が傷だらけで、触るとでこぼこして痛くて、私の指には土がついた。

おじいちゃんは、若いときからずっと農作業をしてきているから、手が傷だらけで、土が入りこんでしまっているのだ。その手で触ると私が嫌がると思って、触らなかつたのだ。優しいから……とても優しいおじいちゃんだから触らなかつたのだ。でもね、おじいちゃん。私は頭なでてほしかったんだよ。「こんなに伸びたんだな」って頭ぐしゃぐしゃしてほしかったんだよ。おじいちゃんの手を、嫌だとか、汚いとか思ったことは本当に無いよ。農作業頑張ってておじいちゃんってすごいな、立派だなんて思ってたんだよ。でも、最後に理由がわかってよかったよ。本当に私を大切にしてくれていたんだね。おじいちゃん、ありがとう。おじいちゃんとの思い出の柱を見ると、自然と涙が出るよ。でもそれは、辛いからじゃないよ。おじいちゃんが、大好きだから泣いてるんだよ。天国で、お幸せに。